事業推進の心　仮設労働安全新生プラン

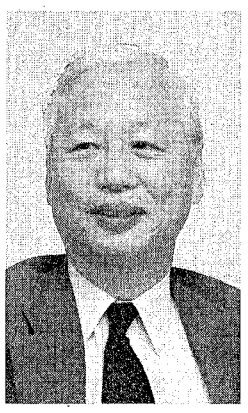
陽のあたる安全文化の創造

もうよそう　ヒューマンエラーの他人事　　築こう　安全足場で身近なあわせ　　めざそう　安心して暮らせる 心豊かな国創り

ACCESS新聞
Alliance Cooperation of Construction Equipment & Scaffolding for Safety
Vol.26
編集・発行人　松本邦宏
発行所
全国仮設安全事業協同組合本部
〒103-0001
東京都中央区日本橋小伝馬町15－18　日本橋ＳＫビル
TEL03－3639－0641
FAX03－3639－0640
北海道支部　〒060-0807　札幌市厚別区下野幌テクノパーク２－１－14　電話(011)738－0641　FAX(011)738－0640
東北支部　〒984-0816　仙台市若林区河原町１－３－24(大和第２ビル１Ｆ)　電話(022)716－6701　FAX(022)716－6710
関東支部　〒103-0001　東京都中央区日本橋小伝馬町15－18(日本橋ＳＫビル４Ｆ)　電話(03)3639－1571　FAX(03)3639－3980
北信越支部　〒950-0951　新潟市鳥屋野２－11－16(吉木工業ビル１Ｆ)　電話(025)282－1031　FAX(025)284－7810
中部支部　〒460-0008　名古屋市中区栄３－25－43(瑞穂ビル２Ｆ)　電話(052)249－7661　FAX(052)242－6280
近畿支部　〒530-0012　大阪市北区芝田１－４－14(芝田町ビル８Ｆ)　電話(06)4802－3071　FAX(06)4802－3070
中国支部　〒730-0017　広島市中区鉄砲町５－21(鉄砲生命広島鉄砲町ビル５Ｆ)　電話(082)511－3051　FAX(082)227－2720
四国支部　〒760-0055　高松市観光通２－２－15(ダイヤビル本館７Ｆ)　電話(087)812－0131　FAX(087)812－0130
九州支部　〒812-0011　福岡市博多区博多駅前４－10－13(共村第３ビル４Ｆ)　電話(092)472－7000　FAX(092)472－7100
ホームページ http://www.kasetsuanzen.or.jp/ Ｅメール info@kasetsuanzen.or.jp 各都道府県の支所へのお問い合わせは、各ブロックの支部まで連絡ください。

手すり先行足場　モデル工事で現行と安全性比較

国土交通省と農林水産省は、2001年度から「手すり先行足場工法」に関するモデル工事を実施していますが、とくに今年度からは新たに「つま先板」の設置も講じられています。モデル工事に関する国交省の取り組みのうち、同省大臣官房官庁営繕部の状況や今後の方向などについて春田浩司部長にお聞きしました。



国土交通省大臣官房官庁営繕部長　春田　浩司氏に聞く

「自信過剰」も事故の要因

――まず、「足場」の安全についての総括的なお話をお聞きしたいと思います

「私ども国土交通省官庁営繕部に限らず、すべての建設工事の施工は安全に進めてもらうことが第一です。しかし、安全を確保するというのは当たり前ではあるけれど、忘れられがちということがある。そして、結果的に安全が損われた場合には、さまざまなリスクが考えられますが、その代償は極めて大きいものです。その意味で、決して安全をないがしろにすべきではないと前々から思っています」

「そのことを踏まえて言うなら、安全というのは、まずはいろんな手立てを講じていても作業者本人が意識を持っていないといけないし、できるだけ事故が発生しないような事前の措置を講じていないといけない。この2つの対策が必要だと考えています」

――ベテランの作業員ほど安全に頓着がない、とよく言われます。そのことの善し悪しは別にして、制度面の整備も欠かせないとの声は依然、根強いようですが

「自分の能力に自信のある人ほど事故を起こす、とよく言われます。逆にいえば、自信のない人は用心をするということかもしれませんが、外国の建設現場を見た場合、日本より対策は劣っているように感じます。先進国の一部でもそうです。国民性の問題もあるでしょうが、自己責任という考えが根本にあるのだろうと思います。社会が守ってくれない状況ですから、自分ですべてをまかなわなくてはいけないということではないでしょうか」

「それに対し日本の制度の場合、責任の所在はどこにあるかということですが、例えば事故が発生した場合は、一義的には受注者（元請け）が安全に対する責任を負っています。課題としては、そのあたりをどこまで、発注者が受注者に対して契約の中で責任分担するのか、ということがあるかも知れませんね」

――仮設業が対象になるか否かは別にして、現在、営繕部でも検討を進められているＣＭ方式との関連は出てきますか

「現在はまだ検討段階ですので、あくまで仮定の話ですが、ＣＭ方式を導入することになれば、現在の請負形態とは安全に対する責任の形は違ってくる可能性はあるかもしれません。具体的なＣＭの在り方というのはこれからの検討に委ねられていますので、断定的なことは言えませんが……。いずれにしても、ＣＭ方式にも直接、専門工事業の方々に分離発注して行う場合と、一括発注したうえで専門工事業の方々を管理してもらうなどいろんな形があり、安全確保に関しては現行の方式が分かりやすい場合もあるかもしれませんので、その整理にはしばらくは時間がかかるでしょうね」

「現行の制度に話を戻すと、ゼネコンがどんなに安全対策に努力をしても、ひとたび何かが起きると、少なくともその部分については責任はあるんですね。ただ内容によっては、書類送検されるとか、刑事責任を問われるとか、指名停止になるとかいうことはないかもしれません」

――官庁営繕部でも昨年度から「手すり先行足場」のモデル工事に着手されていますが、進捗状況を含めて、その狙いなどをお話いただけますか

「足場の流れ（歴史）を大括りで言うと、丸太を番線で結束して足場にしていた時代から工業化製品へと移行してきているわけですが、全体的な風潮として、足場の安全対策は十分だろうという考えがあったと思うんです。ところが、聞いたり検証したりしてみると、そうした近代的な足場から転落したり、物を落としたりして大きな事故につながっているという状況が未だにあるということなんです」

「製品自体は立派な、完成度の高いものになっては来ているのですが、それでももう少し改善の余地はあるということで、手すり先行足場という、さらに完成度を高めたものを試行してみようということでモデル工事を実施していたわけです」

「改善の余地があるにしても、従前の足場に比べたら品質も良くなっているでしょうし、規制も手伝って事故は減ってはいると思うんですが、それでも事故がゼロになったわけではない。そのあたりを分析してみたら、いろんな要因があるので、それをさらに改善しようということでモデル工事に取り組んでいるということです。昨年度は九州で4件を、今年度は全国的に20件以上のモデル工事を指定して実施しています」

――モデル工事を踏まえた取り組みというのは何かイメージがあるのでしょうか

「とりあえずは現行のものとの比較をするということになるのだろうと思います。モデル工事で目に見えて分かるのは、墜落・転落・飛来・落下防止の効果が高くなっているということでしょうね。手すり先行足場は、半分は足場を組み立てる作業員の安全対策ですから、過去にすべって転落しかけたというようなことがあったけれど、モデル工事ではそういったことがなかったということが検証としては明らかになることが期待できるのではないでしょうか。さらに設置した後の、通常のものに比べて安心感があるということも判明するかもしれませんね」

――モデル工事の検証後ということになるのでしょうが、少なくとも営繕部の発注工事では2段手すりや、つま先板は標準設置するようなことになるのでしょうか

「仮にそういうことを試行したとしても、その前提としては市場の供給状態がそういうふうになっているかどうかということも検証する必要があると思います。受注者が対応できないなどということがあってもいけないわけですから。いずれにしても、一般的な形で対応できるかどうかということを現段階では考えてはいませんが、ただ、だれに点検してもらうかということが目的ではないにしても、事故発生をいかに未然に防ぐかという真の目的の観点に立てば要請を考慮してもいいかな、とは思いますね」

（本稿は近く発行する当組合の季刊誌『アクセス』第2号で行った、当組合の小野辰雄理事長との巻頭対談からの抜粋です）

仮設安全時評

養生ネットの透明化が「見える安全」

日本大学理工学部海洋建築工学科教授　横内　憲久

私の専門である海洋建築について、ご説明しますと、この海洋建築は今後のまちづくりや環境にとって重要なキーワードになっていくと思うのです。日本の大都市を見ますと、京都と札幌を除き、すべて海に面しております。つまり、大都市は港から発展したと考えて良いでしょう。

港の利便性を活かした都市開発の近年の歴史を遡ると、わが国では1985年ころからスタートしたウォーターフロントにたどり着きます。

都市にいながら自然と触れ合える新しい都市開発のありようは、東京のお台場地区、横浜のＭＭ21地区、千葉の幕張地区などで注目を集めました。これらの都市開発は、再開発というよりも新たな都心をつくる新開発の実践とも言えました。

日本は、約3万5000㌔の海岸線がありますが、まだまだこの活用方法が十分ではありません。しかし、近年では、ウォーターフロントの魅力が知れわたったことや、港の活用のありようが議論されています。最近では空港を、メタルを利用したメガフロートでつくろうという構想もあり、海洋建築は、さまざまな可能性を秘めていると言えるでしょう。

ところで、私は仮設安全については、素人なのですが、一つ気になることがあります。つまり、建設現場は、養生ネットで隠されて外から中が全く見えない点について、少し疑問に思っているのです。養生ネットの色は、青色、緑色などほとんどが多岐にわたりますが、実は、透明な養生ネットを一度も見たことがないのです。

私は子供のとき、近くの大工さんの家を訪問していましたが、非常に好奇心をもって、大工さんの仕事を見てきました。今、もし仮に、建設現場の風通しが良くなり、外部からも見えるようになれば、子供達だけではなく、大人も立ち止まって現場に関心を持つことになるでしょう。

確かに、一般の人達には、土木の日などに限定し、現場を開放していますが、それだけでは、不十分のような気がするのです。もし、養生ネットを透明化すれば、あるいは批判も好意的な見方も同時に受けることになるかも知れません。

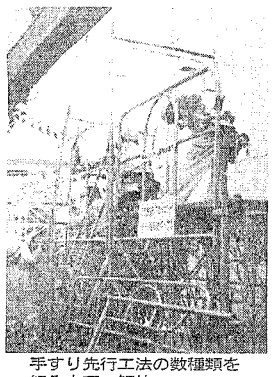
しかし、批判も含めた意見も現場にとっては、重要であると私は思うのです。養生ネットの透明化については技術的に困難であるか、それとも容易であるか、私には分かりませんが、一度チャレンジしてみる価値はあるのではないでしょうか。

組合のパンフレットの中には、「見える安全　感じる安心」をスローガンにしていると言いてあります。現場をガラス張りにするという試みは、まさに、「見える安全　感じる安心」の実践につながるのではないでしょうか。（談）

小野理事長が中央工学校で講義
実習通し安全の意義追求
次代の建設業担う学生110人が参加

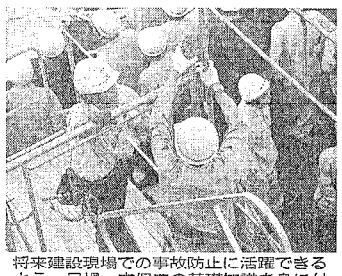
当組合の小野辰雄理事長は2日、東京都北区の建設関連の専門学校、中央工学校の要請を受け、仮設安全工学に関する特別講義を行いました。土木測量学部（柳井修一学部長）の2年生約110人が受講しました。午前中は90分間の座学を、午後からは屋外駐車場で180分かけて、手すり先行足場などの組立、解体を実習しました。小野理事長の真剣な講義に触発された学生は異口同音に「（実習で）体を使って体験できたことは普段と一味違い、身になった」と喜びを語っていました。

学生を前に真剣に講義する小野理事長



手すり先行工法の数種類を組み立て、解体

手すりのない状況での恐怖を体感させる



将来建設現場での事故防止に活躍できるよう、足場・支保工の基礎知識を身に付けるため、必死に実技に取り組む学生

砲玉のようになり、ヘルメットを突き破る」ことを教えました。また、安全帯（命綱）を付けているといっても、先行手すりに架けて落下した場合370㌔の衝撃荷重が、親綱では500㌔の衝撃荷重が掛かる腰部にかかり、健康な人が耐えられる衝撃の限界を超えていることも指摘しました。

午後の実習では、複数の班に分かれ、手すり先行工法のいくつかの種類を実際に組み立て、解体しました。命綱を付けた人形の落下実験も行い、命綱にも限界があることを教えました。

柳井学部長は「ゼネコンなどに就職する卒業生が、建設現場で墜落、転落、飛来落下の防止に活躍してくれることが重要で、足場・支保工の基礎知識をマスターする必要があるため、講習会を開くのは初めてですが、次代を担う学生に対する安全教育を重視しており、他の専門学校や工業高校などの要請にも応じる方針です。

この日受講した学生には後日、組合から「足場仮設安全講習終了証」を授与します。同校からは毎年、当組合に特別講義をお願いしたいとの要請を受け実施しています。

参加学生の声

深井健太さん（ふかい・けんた、20歳、埼玉県川口市）
安全第一というが、命綱を付けていれば大丈夫と最初は思っていました。しかし、そうではないことが良くわかりました。

見城宏さん（けんじょう・ひろし、21歳、群馬県沼田市出身）
仕事とまったく同じことをやれて現実味がありました。机の上の勉強とはひと味違って身になりました。元々、高いところは嫌いじゃありませんが、手すりは一生の友だちだと思いました。また、みなが力を合わせれば一人ではできないことも実現するということを実感することができました。

北条忍さん（ほうじょう・しのぶ、20歳、千葉県館山市）
座学に加え、実際に体を使って体験したことで、安全の重要さがよく分かりました。

巴雄介さん（ともえ・ゆうすけ、19歳、千葉県白浜町）
いろいろな建物がありますが、仮設がなければ、建物を造れないことを実感しました。足場の上段に上ってみると怖かったです。それで、安全帯の重要性も分かりましたし、同時に、安全帯だけでは不十分であることも実感しました。

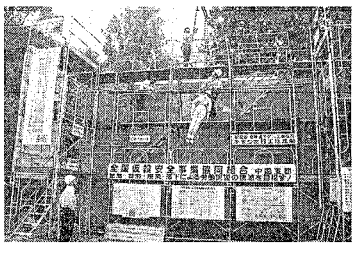
埼玉県建災防大会に協力

建設業労働災害防止協会埼玉支部は9月29日、さいたま市の埼玉会館で「第29回埼玉県建設業労働災害防止大会～墜落ゼロ埼玉推進の集い～」を開催、当組合員の協力を得て、手すり先行足場を展示しました。

建設業労働災害防止協会の支部のイベントで、手すり先行足場が展示されたのは今回がはじめてのことです。また、組合パンフレットや組合が作成した手すり先行足場を展示

タオル500セットを配付しました。

中国支部　国土建設フェアに出展



ダミーを使った墜落実験などで安全をPR

手すり先行足場の安全性ＰＲ

当組合中国支部（吉村譲支部長）は、安全に対する普及活動の一環として、組合が提唱している手すり先行型足場、つま先板などを国土建設フェアに出展しました。会場では、手すり先行工法足場による墜落実験としてダミー人形を使った落下テストを行うなど、その安全性についてＰＲしました。

中国支部は現在、26組合員（23社、3事業所）で活動しています。

今年度は本部の重点施策の方針に基づき現場点検安全目標を200件と設定し、安全点検実施推進協議会を設立、8月末現在で118件を実施しています。

中国地方整備局と中国四国農政局の手すり先行足場モデル工事については、01年度のモデル工事の点検を仮設組合に依頼している地方整備局もあるようです。

営繕部としてはどうなっていますか

「営繕部発注のモデル工事で点検を組合さんにお願いするかどうかということですが、現状としては多くの工事について組合員の方々が納入されているという風に認識していますので、それ以上のことを現段階では考えてはいません。ただ、だれに点検してもらうかということが目的ではないにしても、事故発生をいかに未然に防ぐかという真の目的の観点に立てば要請を考慮してもいいかな、とは思いますね」

（本稿は近く発行する当組合の季刊誌『アクセス』第2号で行った、当組合の小野辰雄理事長との巻頭対談からの抜粋です）

近畿支部が仮設安全大会

11月12日に開催
安全な仮設資材・機材展示も

当組合近畿支部（藤井正光支部長）は11月12日午前11時より、大阪府茨木市内で、「見える安全　感じる安心」をスローガンに「近畿仮設安全大会」を開催します。昨年は全国大会を開催しましたが、今年度は各支部で開催しており、北海道、関東に続き3回目となります。

大会は茨木市福祉文化会館「オークシアター」を会場に、藤井支部長の式辞、当組合の小野辰雄理事長のあいさつに続き、厚生労働省大阪労働局の坂田稔局長、国土交通省近畿地方整備局の林正一企画部技術調査課長、茨木市の山本末男市長から来賓祝辞をいただき、大阪労働局労働基準部の坂本栄生安全課長による安全講話の後、当組合近畿支部の石井正副支部長による大会宣言が行われます。午後にはプロゴルファーの高橋五月氏による特別講演も行われます。

また当日は、会場に隣接する茨木市中央公園・北グラウンドで「安全な仮設資材・機材」の展示会も併催します。展示企業は▷足場機材＝アルインコ、川鉄機材、住友金属建材、全国仮設安全事業協同組合、中央ビルト工業、日工セック、日綜産業、ピカコーポレイション、ホリーエンジニアリング▷仮設資材＝キョーワ、大嘉産業、日本セイフティー、東山産業、藤井電工、明治商工――の各社です。

大会は当組合本部が共催し、軽仮設リース業協会が協賛、日刊建設通信新聞社らの後援を得ています。